
良縁

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

良縁

【Nコード】

N 8 4 1 3 F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

海軍将校伊藤真太郎は横須賀の街で麗しい少女に会った。彼女に惹かれていくが彼女はある人物の妾の子だった。だがそれでも彼は戦前の世界のラブロマンスです。

第一章

良縁

海軍少尉伊藤真太郎は海軍兵学校を出て遠洋航海を終えたばかりであつた。海軍生え抜きの青年将校としてその将来を有望されていた。

海軍将校というだけでなく背も高く容姿端麗だつた。だから実家に帰ればそれこそ大変な騒ぎだつた。それはかなり変わった騒ぎであつた。

「全くな」

「どうかしたのかい？父さん」

「どうしたもこうしたもない」

彼の実家は静岡の方のごく普通の農家だ。幼い頃より神童と謳われ品行方正で知られた彼だがその家は至って普通の農家なのだ。

「御前が兵学校に行つてからこうなつた」

「こつなつたつて？」

「御前が家に帰るとな。いつもこつだ」

家の外を指し示す。見れば若い女の子や学生が結構見える。

「必ずああして家の周りをうろつろしてくる」

「そつえば中学の時はそんなのなかつたような」

「中学は中学だ」

父は言う。見れば伊藤は海軍士官の軍服を着ている。紛れもなく海軍将校である。

「海軍とは違ふ」

「それは自覚しているつもりだけれどね」

「海軍はな」

父は言つた。ごく普通の農家の中で。

「憧れだからな」

「僕もそれはわかつてるつもりだけれどね」

またつもりだと言う伊藤だった。話しながら座布団の上に座りちやぶ台の上のお茶を持った。

「だから入ったんだし」

「入りたいと思って入られる場所じゃないだろう」

海軍は当時はそんな存在だったのだ。

「ましてや兵学校だぞ」

「うん」

「入られるものではない」

東大に入るよりもまだ難しかったのだ。

「そこに入って出ているのだからな」

「だから皆来ているんだ」

「懂れだ」

またこのことを我が子に告げた。

「御前はな。結婚もまだなのだろう？」

「そんな話あったらまず父さんに連絡するよ」

苦笑いしながらお茶を飲んでいる。

「真っ先にね。そうじゃない」

「いつも通りか」

「うん。ところで母さんは？」

「買い物だ」

こう息子に答えた。

「魚を買いに行っている」

「魚ね」

「鯉だ」

笑顔を息子に告げての言葉だ。

「御前の好きなな。どうだ？」

「有り難う」

父のその言葉を聞いて微笑む。

「嬉しいよ。最近食べてなかったからね」

「横須賀にはいい店が多くあるんじゃないのか？」

「忙しくてね」

苦笑いを浮かべて父に述べた。

「外に出る時間が殆どないんだ」

「そうなのか。まあそうだな」

今の彼の言葉を聞いて頷く父だった。

「青年士官はそうだな」

「うん。ずっと船の中にいるよ」

彼は今船の甲板士官をしているのだ。甲板士官とは船の雑務一切を取り仕切る。なりたての海軍将校では最初の仕込みの場である。

「たまに出てもね。艦長達のお供だし」

「宴か」

「うん」

父の言葉に頷く。

「楽しいけれどね。好きなものは食べられないよ」

「そういうものか」

「色々あるから」

海軍の宴会というものはそうだったのだ。若い頃はあくまでお供なのだ。

「だから。どうしてもね」

「鯉も食べられないか」

「縁がなかったよ」

こういうことだった。

「残念なことだね。食べるのは海のものが多いね」

「まあそうだろうな」

息子のその言葉にある程度納得したという感じで応えた。

「そういうものだろうな」

「まあね」

「わしはそういうことは経験ないがな」

農家にあつてはそれも当然だった。宴といえば村の皆で集まって楽しく飲む。そういうものなのだ。海軍のそれとは全く違っている

のだ。

「そういうものなんだな」

「うん。だから嬉しいよ」

にこりと笑って父に告げた。

「今こうして鯉が食べられるのがね」

「いつもいいものを食べているのだろう?」

当時の海軍は将校と下士官及び兵士で食べるものが違っていた。

将校はかなり豪勢なものを食べていたのである。これはイギリス海軍に倣ったことだった。

「それでもか」

「だから。好き嫌いは別だよ」

これが彼の言葉だった。

「味はね」

「そういうものか」

「それでさ。父さん」

話をしながら父に問うた。

「鯉はどう料理するの?」

「鯉こくだ」

料理の名を息子に言った。

「それでいいな」

「うん、有り難う」

父の言葉を受けて穏やかな笑顔になった。

「じゃあそれを頂くよ」

「しかし。おかしなものだな」

父は息子と話しつつそれまで思っていたことを口に出した。

「偉くなっても好きなものは食べられないものか」

「うん」

彼もまた父の言葉に頷く。

「そうみたいだね、本当に」

「世の中は上手くいかないものだな」

「そうかな。上手くいってるじゃない」

「そうか？」

息子の言葉に首を捻ってしまっていた。

「そうは思わないがな」

「だって僕がさ」

「ああ」

「海軍に入ったんだよ」

微笑んで父に告げたのだった。

「しかも兵学校に。卒業して今もこうしてここにいるしさ」

「確かに凄いがな」

それだけ海軍、しかも兵学校に入るということは凄いとされた時代だったのだ。だから父も息子のこのことを振り返って凄いと言うのだ。

第二章

「そうだよな。それはな」

「それに今こうして食べられるし」

「鯉をか」

「期待してるよ」

また笑顔で父に語った。

「その鯉をね」

「ああ。母さんに任せておけ」

「そうさせてもらうよ。ところでね」

また父に言ってきた。

「これから暫く家にいるけれど」

「それがどうしたんだ？」

「それだよ。ちよつと色々回らないといけないんだよね」

「色々とか」

「うん。海軍だった人とか」

当時の海軍将校は何かという行かなければならない場所が多かったのだ。郷土の顔役やそうした面々にも顔を出さなければならなかったのである。これも海軍将校という地位故のことだ。ただ海軍にいてそこで部下を指揮していればいいというものではなかったのだ。

「あと村長さんにもね」

「村長さんもか」

「うん。別にいいよね」

「悪い筈がないだろう」

笑顔で息子に告げた。

「喜んでくれるさ。兵学校を卒業してからずっと帰ってなかったからな」

「そうだよな。卒業して遠洋航海に出て」

「その時の話もすればいい」

「色々あつたよ」

また笑顔で父に告げた。

「本当にね。色々とね」

「海か」

「人もね。まあ兵学校の伝統とか」

「それも話せばいい。聞きたい人間は幾らでもいる」

そういう時代だった。海軍といえば皆の憧れだったのだ。今となつては遙かな昔だ。

「だからな。それも話してな」

「うん。そうさせてもらうよ」

最後まで笑顔だった。笑顔で話し終えてそれから数日は本当に地元の顔役の家を巡ったり海軍に興味がある女の子や子供達にあれこれと優しく話したりした。休暇であってもそれなりに忙しい日々を過ごすことになった。

それが終わってからだった。彼一通り終わった夜実家で一人酒を飲んでいた。しかしそこにすぐに彼の両親がやって来たのだった。

「ああ、まだ起きてたんだ」

「まあな」

「ちよつと寝れなくてね」

「寝れなくてって」

母の言葉を聞いて壁にかけてある時計に目をやった。見ればまだ九時である。

「まだ早いよ。寝るにはね」

「ああ、そうか」

「そういえばそうだね」

「どうしたんだよ。ああ」

話しているその時にふと気付いた。

「飲む？お酒」

「ああ、三人でな」

「飲もうか」

こう言つて息子から杯を受け取った二人だった。こうして親子三人で静かに飲みはじめた。肴は梅でそれを一粒一粒食べながら酒を飲んでいた。

飲みながら伊藤は。両親に対して問うてきた。

「よかつたよ」

「何がだい？」

「皆元気ださ」

微笑んでこう告げたのだった。

「真也も真之介もね。ノブもクミも」

「皆元気だよ」

「安心したかい」

「うん」

弟や妹達が前と変わらず元気だったことも彼の喜びだったのだ。

今それを言っているのだ。

「それはね」

「そうか。それは何よりだな」

「皆変わらないよ」

母は優しい笑みで息子に告げてきた。

「それでね」

「何だい？」

「御前、そろそろ」

「そろそろつてまさか」

「そう、そのまさかだよ」

顔が少し真剣なものになっていた。その顔で息子に言つたのだ。身を固めないのかい？」

「わし等が今一番気にしているのはそれなんだよ」

「それって言われてもね」

だが伊藤は両親のその言葉に今一つ晴れない顔を見せてきた。

「今のところは」

「結婚するつもりはないのかい」

「ないわけじゃないよ」

それは否定するのだった。

「それはね」

「じゃああるのかい」

「それはよかったけれど」

「言われてるんだよ」

ここで困った顔を見せる伊藤だった。それは息子としてよりも海軍士官としてのものだった。

「あまり変な相手とは遊ぶ位にしておけてね」

「遊ぶだけ？」

「うん。結婚する相手はさ」

ここでまた一つ海軍の難しさが述べられた。

「しっかしした家じゃないと駄目だってね」

「しっかしした家っていつでも」

「うちはほんの農家だよ」

彼等に見てみればそうだった。あくまでほんの一農家なのだ。その意識しかない。

「それでどうしてしっかしした家なんて」

「その人さえまともなら」

「どうもそういかないんだよ」

だがそれでも彼は両親に言うのだった。酒は何時しか三人共止まっていた。

「海軍だとね」

「難しいのね」

「難しいよ。むしろね」

「むしろ」

「そういう意味じゃここにいる方がよかったかな」

「馬鹿を言え」

今の言葉はすぐに父親によって打ち消されてしまった。

第三章

「御前は海軍だぞ」

「うん」

「しかも将校じゃないか。それでどうしてそんなことを言うんだ」

「じゃあどう言えばいいんだい？」

「お国の為だろう、やっぱり」

この時はまだこう軽く言われるだけだった。これが深刻に言われるようになったのはやはり戦争になってからだ。全てを覆ったあの戦争になってからだ。

「そうだろう？」

「まあそうだけれど」

「わかっていたらそんなことを言うな」
言葉が厳しくなっていた。

「わかったな」

「わかったよ。それじゃあ」

「まあとにかくいい人を紹介してもらえ」

「そんな話もあるんだろう？」

「多分」

今度の返事は今一つ要領を得ないものだった。

「そうだと思うけれど」

「何か頼りない返事だな」

「まだ自分になっていないからね」

だからなのだった。海軍将校はそうした縁談の話には事欠かなかったがそれでも伊藤はまだ自分自身が受けてはいない。だからこう答えるしかなかったのだ。

「だから何とも言えないよ」

「だからか」

「うん。それにしても」

ここで腕を組んで両親に対して言う。

「どうなるのかな、そっちは」

「いいようになればいいけれどね」

「そうだね」

母親に返すのもこんな調子だった。何はともあれ彼は家族との久しぶりの団欒をこうした感じ過ごした。それが終わり横須賀に戻る。とまた仕事の日々だった。仕事が終わっても何かと忙しく船から出ることも容易ではなかった。だが時々艦長から声がかかり外に出ることができた。この日がたまたまそうだった。

宴会だった。宴会では今日はレストランだった。そこで船の士官達が集い楽しく美酒と美食に興じていた。見ればメニューはステーキだった。

「このステーキは凄いぞ」

「凄いといえますと」

「あれだ。英吉利のものだ」

見事な口髭を生やした艦長が部下の問いに応えていた。

「英吉利風のな。焼き方なのだ」

「英吉利のですか」

「そうだ、本場のな。どうだ」

「ふむ。確かに」

「見事な焼き方ですな」

「英吉利の料理はまずいという」

艦長は不意にこのことを言った。

「しかしだ。海軍は違う」

「そうですね。確かに」

「あのビーフシチューもまた」

「そうだろう？あれもいい」

「全くだす」

「流石はロイヤル・ネービー」

部下達は少し相槌を打つようにして言っていた。皆軍服のままで

ある。海軍だけでなく陸軍も軍服で外に出て宴を行うのが普通だったのだ。

「ではこのステーキを焼いているシェフは」

「馴染みだ、わしのな」

「艦長のですか」

「わしがまだ大尉の時にいた船での給養班だった奴でな」

「ほう、そうだったのですか」

「それが今ではここにいます」

つまり海軍出身というわけである。

「そういうわけでな。知っているのだ」

「そうでしたか」

「腕はかなりだぞ」

そのステーキを切りながら語る。

「そうだろう？このステーキも」

「ええ」

「それにこの店はステーキだけではない」

「といますと」

「パンは食べたか？」

今度問うたのはパンについてだった。

「このパンは。どうだ？」

「むむっ、そういえば」

「この味は」

「いいだろう。これも英吉利風だ」

「実に本格的ですな」

「パンまで」

「そしてワインは仏蘭西だ」

酒はそれだという。

「英吉利にはワインがないからな」

「しかし仏蘭西のものですか」

「ワインまで」

「何もかも本格的というわけだ。本格が一番だな」

「はい、まさしく」

「何もかも本物でなければ」

士官達はまた艦長の言葉に相槌を打つ。やはりどうしても追従に見える部分がある。だがそれでも彼等は楽しく飲み食いをしていた。

「今日は楽しくやろう」

「はい」

士官達はあらためて艦長の言葉に頷いた。艦長はここで士官達の末席にいる伊藤に顔を向けた。そのうえで彼に声をかけてきた。

「伊藤少尉」

「はい」

「楽しくやっているか？」

「はい、それは」

礼儀正しく艦長に言葉を返した。

「お気遣い有り難うございます」

「もうこの船に来てどれ位だ？」

「三ヶ月でしょうか」

少し考えてからこう答えた。実際に頭の中で着任した年月を勘定もした。

「それ位になります」

「もう馴れたか？」

「はい」

やはり丁寧に艦長の問いに答えた。

第四章

「それはもう」

「戦艦の甲板士官だが」

言うまでもなく海軍の中でもエリートコースである。

「大変だろう、実に」

「いえ」

しかしこの問いにはこう返したのだ。毅然として。

「やりがいのある職務です」

「やりがいがあるか」

「はい」

毅然とした言葉であつた。

「ですからそうは」

「そうだ。それでいい」

艦長は今の伊藤の言葉に満足した顔で頷いてみせてきた。

「その意気だ。それが海軍だ」

「海軍ですか」

「何があつても苦しいことはない」

これは意地なのだ。

「そういうものだ。だからだ」

「辛くはありません」

「そういうことだ。どんな職務であつても果敢に挑み果たす」

「戦場にあつては果敢に戦い勝利する」

「そういうことだ」

当時の海軍は常に実戦を念頭に置いていた。そういう時代だったのだ。だから彼等も今ここで戦場や勝利という言葉をあえて出しているのである。

「わかつたな。それではだ」

「はい」

「そのやりがい忘れな」

「わかりました」

「それでだ」

艦長はここまで話したところで不意に言葉の調子を変えてきた。

「一つ言っておくことがある」

「何でしょうか」

「職務とは直接的には関係がない」

まずはこう前置きしてきた。

「直接にはな」

「直接にはですか」

「しかし必ずしておかなければならない」

だがこうも言うのだった。

「必ずな。つまりだ」

「結婚ですか」

「いいぞ。鋭い」

伊藤がすぐに答えてきたのを聞いて不敵に笑う艦長だった。当然褒めているのである。

「その鋭さがなくては駄目だ」

「有り難うございます」

「そう、結婚だ」

あらためてこう答えてきたのである。

「結婚だが」

「それはどうも」

「今のところ相手はいないか」

「はい」

一言で答える伊藤だった。隠すところはなかった。

「まだ。それは」

「娶るのは早い方がいい」

「早い方がですか」

「そうだ」

艦長はまた答えた。

「できるだけな。早い方がいい」

「左様ですか」

「わかったな。だからだ」

これまでよりもリラックスして話をしていた。フォークとナイフを使うその手の動きも早い。

「相手を見つけれ」

「相手をですか」

「そうでなければこちらから見つけてやる」

つまり見合いというわけだ。この時代海軍だけでなく陸軍の将校もまた早いうちに結婚を勧められそれをしてきた。相手は良家の出が多かった。

「それでいいな」

「わかりました。それでは」

「自分で見つけるか？」

「努力します」

これまでよりもずっと齒切れの弱い返事であった。

「まずは自分で」

「まずはか」

艦長は伊藤のその言葉を聞いてまずは考える顔になった。しかしそれはすぐに止めたのだった。そのうえでまた伊藤に対して話す。

「そうだ、それだ」

「相手を見つけることもなのですね」

「何事も積極先取だ」

海軍のモットーの一つだ。

「だからだ。いいな」

「わかりました。それでは」

この場では毅然として応えることができた。しかしこればかりは相手がいてのことだ。しかも海軍将校である。その辺りの相手というわけにもいかない。忙しい身の上もありこのことに関してはお世

辞にも進んでいるとは言えなかった。そんな中でのことのある日のことだった。

第五章

今度は久し振りの休日だった。それで借りてある宿舎に戻りに行った。一応そういうものを持つてはいるのだがあまりにも忙しく殆ど戻ることはできていなかった。これも海軍将校の生活だったのだ。そんな中でやっと戻れて道を一人歩いている。その時にふと着飾った少女とすれ違った。淡い桜色の着物に紅の袴、それに白い日笠に黒いブーツというこの時のトップモードだった。黒く長い髪を伸ばしている。顔立ちは幼いながら気品があり黒く大きな目がぱっちりとしている。顔は白く身体は細い。小柄でとても目立つ少女だった。

「あつ……」

思わず振り向いて声をあげてしまった。

「あの人は」

「あの人は」

すれ違ったその時に声をあげてしまったのがきつかけだった。少女はこちらを振り向いてきた。

「あの人はどなたですか？」

「えっ、いや」

「貴方は」

ここで少女は彼を見てしまった。ここでもやはり海軍の軍服を着ていた。

「海軍の方ですね」

「はい」

海軍ならば曖昧な返答は許されない。毅然とした言葉を返したのだった。

「そうです。海軍少尉伊藤信太郎」

「伊藤様ですか」

「そうです。只今横須賀に赴任しております」

姿勢を正し敬礼をしたうえで答える。

「以上であります」

「少尉さんですか」

「はい」

またはつきりと答えた。

「その通りです」

「そうですか。私はですね」

「貴女は」

「学生です。この横須賀の女学院に通学しています」

「左様ですか」

「名前は祥子」

にこりと笑って名乗ってきた。

「井伏祥子と申します」

「井伏祥子さんですか」

「はい」

そのにこりとした笑みをまた返してきた。

「そうです。宜しければ以後お見知りおきを」

「わかりました」

伊藤も礼儀正しく言葉を返した。

「それではそのように」

「はい。御願います」

「ええ。それで井伏さん」

彼女を名字で呼んだ。

「今からお帰りですか」

「はい、そうですか」

「それではですね」

祥子のその言葉を聞いて海軍軍人の心を思い出した。スマートで目先が利いて几帳面というのが海軍将校であるとされていたが紳士だれとも厳しく言われていたのだ。

「お家まで送らせて頂いて宜しいですか」

「伊藤様がですか」

「いけませんか」

祥子に対して問い返す。

「それで。なりませんか」

「宜しいのですか？」

受け入れも拒みもせずこう返してきた。

「それで。伊藤様は」

「私ですか」

「はい。伊藤様の方で何か御用件でも」

「それは御心配なく」

静かに微笑んでみせて彼女に返した。

「今はただ下宿に帰るだけです」

「それだけですか」

「はい、それだけです」

その微笑みのまま祥子に答えた。

「それだけです。ですから」

「宜しいのですか」

「ですから。宜しければ」

また言う伊藤だった。

「如何でしょうか」

「御願いしても宜しいのですね」

「はい」

はつきりと答えた伊藤であった。

「是非。お任せ下さい」

「そこまで仰るのなら」

祥子は伊藤に対して何の疑いも抱いていなかった。彼の誠実な申し出を信じたということもそうだがそれと共に軍人という職業への信頼もあった。この時代軍人は悪いことはしないと信じられていたのだ。軍人は頭も身体も優秀で品行方正な者になるものだったからだ。

「御願います」

「はい。それでは」

「私のお家はですね」

「はい」

「あちらです」

まずは道の右手に顔を向けてきた。

「あちらの方に少し行きまして」

「どうなるのですか」

「詳しく案内させて頂きますね」

「はい、御願います」

こうして祥子を守りそのまま彼女の家までついて行った。玄関まで辿り着いたその時彼は驚くことになった。まずはその玄関を見た。

「何と」

「どうされましたか？」

「ここが井伏さんのお家ですか？」

「はい、そうです」

伊藤に顔を向けて静かに答えてきた。何とその玄関は西洋風の巨大な門だったからだ。普通の玄関と言っているものではない。

「ここですが」

「何と。いや」

最初は驚いたがすぐにわかった。祥子は話し方や服装を見ても育ちがいい。それならばそれなりの家にいることは当然であった。

「何でもありません」

「そうですか」

「井伏様ですか」

「母の姓です」

穏やかに笑って述べてきた。

「母の」

「お母上のですか」

「ですが。今はいません」

伊藤に対して寂しい顔を見せてきた。

「今は。もう」

「そうですか」

それがどうしてかはわかった。だからあえて問わなかった。伊藤の気遣いである。

「それでですね」

「ええ」

そのうえで祥子の話を聞く。

「今は私と」

「貴女と」

「婆やと二人の女中と一緒に暮らしています」

「こちらのお屋敷にですね」

「はい、そうです」

見れば見事な洋館だった。白い二階建ての大きな屋敷で斜になった屋根は赤い。その屋根がまた白い壁と対比になっていて実に見栄えがよかった。

「ここにです」

「そうなのですか」

伊藤は話を聞いてからまた問うた。

「それで」

「はい。何でしょうか」

「学校にはいつもお一人で」

「はい、そうです」

静かに伊藤に答えてきた。

第六章

「いつも。晴でも雨でも」

「家の方にはついて来てもらわないのですか」

これは用心の為だった。誘拐やそういったものを心配してのことである。

「それはないのですか」

「お父様のお考えでして」

「お父上の」

「そうなのです」

こう答える祥子だった。

「お父様が。そうされよと」

「またどうして」

「何でも陛下がそうされていたとか」

「陛下！？ああ、そうですか」

この言葉で何故彼女が学校から家まで一人で往復しているのかわかった。昭和帝、つまり今上帝に倣ったことだったのである。

「乃木大将のあれですね」

「そう、あれです」

祥子もそれに答える。

「雨でも晴れでも一人で歩いて通学しなければならないと」

「よい教えます」

宿敵とも言っている陸軍だったがこのことは素直に賞賛している伊藤だった。

「皇室の方にそう進言できるとは。御見事です」

「そうですね。確かに」

「そしてそれをお受けになられた陛下」

当時はまだ皇太子でもなかったがあえてこう呼んだのだ。

「御立派です」

「それでお父様は私に」

「そうだったのですね」

「はい。それで私はこうして」

己の事情を再び話す。

「家から学校まで。一人で歩いているのです」

「それはいいことです」

彼もそれはいいこととする。

「ですが」

「ですが？」

「用心はして下さい」

こう言うのであった。

「いざという時は。街にはよからぬ者もいますので」

「それはわかっているつもりです」

しかし祥子はここでこう言ってきたのだった。

「それもまた」

「わかっておられると」

「はい、そうです」

またこくりと頷いてきた。

「ですから。御安心下さい」

「何か備えてもおありで？」

「これです」

小袖の中に手を入れた。そしてそこから出して来たのは何と一振りの小刀であった。確かに小さいが何か得体の知れない威厳がそこにはあった。

「これをいつも持っています」

「小刀ですか」

「これもお父様に言われました」

言葉自体はおずおずとしていた。

「我が身は何としても守れと」

「我が身は」

「そう。そして」

祥子はさらに言う。

「それができない時は」

「その時は」

「自ら命を絶てと」

言葉だけでなくその目も険しいものになっていた。それまでの穏やかな雰囲気の様子からは全く想像できない顔がそこにあった。

「そう。教えられています」

「覚悟をですね」

「そう。覚悟をです」

自分でもそれを言う様子だった。

「何があっても」

「何があってもですか」

「女も誇りを持てと」

言葉がさらに強いものになっていた。

「そう言われて今までやってきました」

「左様ですか」

「はい。誇りと恥を知れと」

祥子の言葉が続く。

「そう言われてきましたので」

「そうだったのですか」

「ですから。何があっても」

また言う様子だった。

「私は守ります。お父様の御言葉を」

「そして誇りをですね」

「そうです。何があっても」

「よい御心です」

伊藤は祥子のその言葉を聞いて微笑んでい頷いて言った。

「そこまでの覚悟がありとは」

「私はただ」

「ですが滅多に持てるものではありません」

「覚悟をですか？」

「そうです。俗にはよく言われることです」

この時代ではそうであつた。女もそれだけの覚悟を持てと。しかしそれを実際にここまで覚悟して生きているのは彼が見たのは祥子
がはじめてだつたのだ。それで感銘を受けない筈がなかつた。

「ですが。現実には」

「そうだったのですか」

「貴女は立派な方です」

こうまで言つた。

「そこまでの心を持つておられるとは」

「有り難うございます」

「この洋館におられるのですね」

「はい」

伊藤の言葉に頷いてきた。

第七章

「そうです。そして女学院に」

「わかりました。では井伏さん」

彼女の姓を呼んだ。

「また縁がおりでしたら」

「はい、また」

「御会いしましょう」

この時はこれで別れた。しかしそれから数日後。また下宿に帰る途中だった。そこで祥子と会ったのだった。今度はお互いすぐにかつた。

「あつ、また」

「御会いしましたね」

「ええ」

お互い顔を見合わせて言葉を交えさせる。

「まさかまた御会いできるとは」

「思いませんでした」

こう伊藤に返してきた。

「しかも同じ場所で」

「そうですね。ところで」

「はい」

「また。何かあつてはいけませんので」

こう祥子に話を切り出してきた。

「宜しければまた送らせて頂いて宜しいですか？」

「はい」

静かに微笑んで伊藤に応えてきた。

「宜しければ。御願います」

「わかりました。それでは」

こうして伊藤はまた祥子を家まで送ることになった。夕焼けの赤

い光が横須賀の街を化粧している。海は赤と銀に輝いている。その海を横で見ながら祥子に言ってきた。

「あのですね」

「何でしょうか」

「生まれてからこちらなのですか？」

「こう彼女に問うたのである。」

「ここで。生まれているのでしょうか」

「いえ、元は東京でした」

「東京でしたか」

「母の生まれは山形でした」

「今度は祥子から言ってきた。」

「東京に出てきまして。それで」

「お父上と御会いしたのですね」

「そうです」

伊藤の問いに答えてきた。

「そうです。そこで」

「そうだったのですか」

「生まれてから暫くは東京にいました」

「東京のどちらに」

「赤坂です」

「赤坂に」

「はい」

伊藤に述べてから頷いてきた。

「そこに。小さい頃はいました」

「そうだったのですか。赤坂に」

「ですが。母の身体が悪くなって」

「お母上が」

「労咳でした」

ここで当時はよくあった病気が出て来た。所謂結核である。これは長い間かかってしまえばそれで命はないという恐ろしい病気であ

った。これで命を落とさないようになるのは終戦直後からである。
ペニシリンが開発されてそれが克服されたのである。だがそれまで
は確実に死に至る病であったのだ。

「そのせいで」

「ここに移られたのですね」

「父の薦めでした」

俯いた顔で伊藤に答えてきた。

「それで。こちらに」

「左様でしたか」

「ええ。それでここに」

「ではここはもう長いのですか？」

「十年になるでしょうか」

答える祥子の顔は過去を見ているものであった。

「もう。ここに来て」

「長いですね」

伊藤はそれを聞いて顔を正面に向けて述べた。

「それではもう」

「長いですか」

「私はまだ一年も経っていません」

今度は己のことを語ってきた。

「ずっと静岡にいまして」

「静岡にですか」

「生まれはそこでした」

正直に語っていた。

「そして。兵学校で過ごして」

「江田島でしたよね」

「はい」

言わずと知れた海軍兵学校である。海軍はここで若き士官候補生
達を育てていたのである。その場所は厳格さと共によく知られてい
た。

「あそこです」

「そうですね。では横須賀は」

「実習や遠洋航海で来たことはあります」

このことは言った。

「ですが長い間いたことは」

「今はじめてですか」

「ですからこの街のことはまだよくは知りません」

「それでしたら」

祥子はそれを奇異抵当に対して言ってきた。

「あのですね」

「ええ」

「宜しければですけど」

慎みを以って彼に述べてきた。

「お時間がある時に。案内させて宜しいですか」

「この街をですか」

「よく知りたいですよね」

伊藤の顔を見てきての言葉であった。

「この街のことを。そうですね」

「ええ、それは」

知りたくない筈もなかった。今いるこの街のことをよりよく知りたいと思うのは当然のことだった。それは彼も同じだったのである。

「その通りですが」

「では。それで宜しいですか？」

伊藤の顔を見上げて彼に言うのだった。

「私が、案内させて頂いても」

「貴女がですか」

「そうです」

また言ってきた。

「御嫌ですか？それは」

「いえ」

祥子のその言葉には首を横に振るのだった。

「願ってもない御言葉です」

「それでは」

「はい。御願います」

自分からも願ってきた。

「それで。是非共」

「ではお時間がある時に」

「待ち合わせ場所は」

「休みの日にはいつも家にいますので」

「お屋敷にですね」

祥子に対して問うた。

「そこですね」

「はい、そうです」

祥子の返事は伊藤の願っていたものだった。そのうえさらに言うのだった。

第八章

「そして普段の日家に帰る時間は」

「この時間帯ですか」

「時間はいつも決まっています」

「こうも言ってきた。

「この時間帯です」

「そうですか。それでは」

「いつもはお忙しいですね」

「残念ですが」

「ついつい苦笑いになってしまった。こればかりはどうしようもなかった。

「ですから正直時間に関しては」

「それでも。お時間があれば」

「ええ」

何時の間にか祥子のペースになっていた。どうやらこれで意外と強い少女のようである。伊藤は心の中でそう分析もしていた。

「御一緒させて下さい」

「わかりました」

こうして二人のささやかな交流がはじまった。最初は誰にも知らなかった。だがある日。艦橋にいた彼のところに副長が来た。そうして笑いながら彼に声をかけてきたのだった。

「伊藤少尉」

「あつ、副長」

彼の姿を認めて慌てて敬礼する。今まで下士官達にあれこれと指示を出していたのだ。副長はそれに合わせて返礼をしてきた。それから彼に言ってきた。

「話は聞いたぞ」

「といたしますと」

いきなりこう言われて今度は目を丸くさせた。

「何をでしょうか」

「いい相手が見つかったそうだな」

「いい相手!？」

「ははは、とぼける必要はないぞ」

副長は顔を崩して彼に言ってきた。

「あれだ。最近時間があれば会っているそうだな」

「まさかそれは」

「そう、そのまさかだ」

その崩した顔でまた言ってきた。

「噂になっているぞ。色々とな」

「はあ」

「こういうことはすぐに知れ渡る」

副長の言葉は教訓めいたものになっていた。

「すぐにな。少なくとも海軍ではそうだ」

「左様ですか」

「相手は女学生だそうだな」

そこまでわかつているというのだった。

「まだ婚礼には早いがそれでもな。許婚ならばな」

「はあ」

「申し分ないな。何時からだ？」

「ついこの前からです」

素直に副長に答えた。

「この前会って」

「ふむ、早いな」

「それでなのですが」

「そうか。今のところはまだそういった交際か」

「はい、そうです」

また素直に答えた。

「今のところは」

「それでいい。それでそのお嬢さんだが」

今度は彼女への話になった。

「横須賀におられるのだな」

「はい、品のある洋館に」

このことも答えた。

「何人かの使用人の方と一緒に住んでおられます」

「洋館か」

「はい、そうです」

また答える。

「ただ、ご両親と一緒にではありません」

「むっ!？」

それを聞いた副長の眉が歪んだ。

「今何と言ったか」

「ですから、ご両親と一緒にではありません」

「ご両親と一緒にではない」

それを確認して腕を組みはじめた。

「そうなのか」

「それが何か」

「いやな」

ここでさらに首を傾げてきた。

「一緒ではないのか。では聞きたい」

「はい」

伊藤にさらに尋ねてきた。

「お母上はどうされたのか」

「亡くなられたとのことです」

祥子に言われたことそのままであった。

「何でも」

「亡くなられたか」

「元は赤坂におられたそうです」

「赤坂か」

副長の目がさらに顰められた。

「東京の赤坂だな」

「その通りです」

「わかった。それではだ」

彼はさらに伊藤に問うてきた。

「さらに聞きたい」

「はい、何でしょうか」

「お父上はどうされておられるか」

話の最も重要な部分であった。

「こちらにおられないようだが」

「何でもずつと東京におられるとのことですよ」

このこともそのまま祥子から聞いたことである。

第九章

「そう聞いていますか」

「そうか。東京にか」

「はい」

何の淀みもない答えだった。

「その通りです」

「わかった。では最後に聞きたい」

副長はかなり疑いを持つている目であった。その目で彼に対して最後の問いを出してきたのであった。かなり慎重な様子であった。

「そのお嬢さんの名前だが」

「名前ですか」

「何とおっしゃるのか」

「井伏です」

「井伏!？」

疑いがかかなり確信に近付いた目になった。

「井伏か」

「はい。井伏祥子さんとおっしゃいます」

下の名前も述べた。

「それがその方の名前です」

「いかな」

副長はその名前を聞いて首を横に振った。

「いかな、いかな」

「といいますと」

残念そうに首を横に振る副長に対して問うた。

「何がでしょうか」

「いかな、その人は駄目だ」

「駄目ですか」

「そうだ」

顔を上げて言った。

「そのお嬢さんはな。駄目だ」

「駄目といえますと」

「諦めるべきだというのだ」

今度ははつきりと言ってきた。

「あの人はな」

「また何故」

「訳を知りたいみたいだな」

「はい」

そのことを否定しなかった。今度は彼がはつきりと答えた。

「その通りです」

「そう言うと思っていた」

副長もそれは呼んでいたようである。

「君ならな。それではだ」

「それでは？」

「ああ、済まない」

副長は何故かここで艦橋にいた先任下士官の一人に声をかけた。

実質的に船を動かしている古強者達である。軍の縁の下の力持ちだ。

「少し頼めるかな」

「わかりました」

これだけで話を通じた。

「それでは暫く」

「悪いな。では砲術士」

彼を役職で呼んだ。普段士官はこうした艦内での役職で呼ばれるものだ。少尉という階級で呼ばれることは少ないのである。

「行こうか」

「は、はい」

「とはいっても安心してくれ」

彼が不安になる前に言ってきたくれた。

「別に何かをするわけじゃない」

「左様ですか」

「ただ。事実を話すだけだ」

しかしここで副長の顔が険しいものになった。

「事実をな」

「事実をですか」

「それだけだ。では行こう」

「わかりました」

こうして彼は副長に連れて行かれた。連れて行かされた場所は何と艦長室だった。副長はまずその鉄の扉の前に立ちノックした。するとすぐに返事が返って来た。

「何だ」

「副長及び砲術士です」

こう扉の向こう、部屋の中にいる艦長に対して返した。

「入ります」

「うむ」

こうしたやり取りの後で扉が開かれる。そうして中に入ると艦長は丁度自分の机で何かを書いていた。部屋の中は艦長室らしく中々広くそのうえ豪華な装飾まである。流石は戦艦の艦長室だけはあると思わせるものがそこにはあった。窓のカーテンも白く奇麗にされている。艦長はその部屋の木の机に座っていた。

「それで副長」

「はい」

二人がまずやり取りをはじめた。

「何があった？艦内のことか」

甲板士官でもある伊藤を見つつ副長に問う。

「何かあったのか」

「艦内のことではありません」

副長はきびきびとした動作での敬礼と共に艦長に答えた。

「そうではないのです」

「違うのか」

「はい。あのことです」

「あのこと!？」

あのことと聞いただけで艦長の眉がぴくり、と動いた。

「あのことか」

「そうです。井伏様の件ですが」

「わかった」

艦長は伊藤を見つつ副長の言葉に頷いていた。

「そういうことか」

「その通りです。如何でしょうか」

「わしから話そう」

伊藤を見たまままた副長の言葉に応えていた。

「それでいいか」

「ではそれで御願います」

「うむ。しかしだ」

二人だけの深刻な会話が続いていた。

「君もいてくれ。いいな」

「わかりました」

「それではだ」

艦長は副長とここまで話したうえで伊藤に顔を向けてきた。そのうえで彼に対しても言うのだった。

「砲術士」

「はい」

「まずは座って話をするか」

「座ってですか」

「そうだ。この話はだ」

語るその口が重厚なものになっていた。

「かなり厄介な話だからな」

「それでもいいか」

副長も横から彼に言ってきた。

「それでもいいというのならいいが」

「勿論です」

彼は迷わなかった。

「是非共御願います」

「わかった。それではだ」

「まずは座ろう」

副長と艦長がまたそれぞれ言ってきたのだった。

「それからだ。話は」

「それでいいな」

「わかりました」

こうして伊藤は二人から話を聞くことになった。そしてその話は、彼にとっては驚くべきことであった。

「お妾さん、だったのですか」

「そうだ」

艦長が伊藤の向かい側にいた。今伊藤と二人は艦長室のソファのところに向かい合って座っている。伊藤が一人で、艦長と副長は並んでである。

第十章

「あのお嬢さんの御母堂はな。そうだったのだ」

「そしてだ。その身受けをした方はだ」

「どなたですか？」

「岩山善四郎」

艦長がこの名前を出してきた。その名前を聞いて伊藤も思わず身体をこわばらせてしまった。そのうえで完全に動きが止まっていたのだった。

「岩山善四郎といいますとあの」

「そうだ、あのだ」

「何度も首相や様々な閣僚を経験し公爵にもなっているな」

「あの岩山善四郎だったのですか」

副長の言葉には何とかといった感じで応えることができた。

「あの。政界、いえ各界の首領とまで言われる」

「山縣有朋と同じだ」

かつて陸軍や警察、内務省に権力基盤を置き日本の元老として君臨した男である。その評判は陰気な人間性と謀略を好むやり方、汚職で生前からかなり悪かった。

「俗に言えばな」

「あの山縣公爵とですか」

「そうだ。まさにな」

「確かに噂では」

このことについては伊藤も知らないわけではなかった。

「よからぬ噂を度々聞いていますが」

「その人物の妾の娘さんだぞ」

「はい」

「わかるな」

声も目も咎めるものになっていた。

「結婚となればだ」

「そうですね」

「心配するな。相手は幾らでもいる」

「確かに岩山公爵は海軍とも縁が深い」

副長も言ってきた。彼の基盤はどちらかといえば陸軍よりも海軍にあるのだ。それは藩閥政治の名残で彼が薩摩出身だったからである。

「だが。それでもだ」

「止めるべきだと」

「好きか」

ここで不意に伊藤に聞いてきた。

「あのお嬢さんが好きか」

「それは」

「まだ知り合って日が浅いのだな」

「そうです」

それはその通りだった。

「まだそれ程」

「ならばいいな」

これを聞いて納得した顔になる艦長であった。

「忘れるのだ。いいな」

「忘れるのですか」

「それが君の為だ」

「それにだ」

また副長が横から言ってきた。

「我々は海軍だ」

「はい」

「相手の出も気にしなければならぬ」

そういうふうになっていたのだ。海軍がエリートとされていたからでのことだ。

「だから。妾さんの娘さんは」

「そうなりますか」

「おそらくはだ」

艦長はまた伊藤に言ってきた。

「悪い娘さんではあるまい」

「はい、そうです」

これは伊藤が一番よくわかっていることだった。

「それに関しましては」

「それはわかる」

伊藤のその言葉を受けて頷く。

「しかしだ。それでもだ」

「やはり駄目ですか」

「そうだ。あまりにも危険だ」

またこう言ってきた。

「その父親がな。それも考えるのだ」

「相手だけではなく」

「そうだ。相手だけではない」

艦長は念を押してきた。

「その出自や親も」

「よく考えなければならぬのだ」

副長もまた言うことは同じだった。

「だからだ。諦める」

「どうしてもですか」

「そうだ。ここは退け」

こうまで言うのだった。

「これからは会わない方がいいな」

「彼女ともですか」

「別に会わないこともできるだろう?」

「違うか?」

今度は二人で彼に問うてきたのだった。

「だからだ。いいな」

「諦めるのだ」

「左様ですか」

「うむ。我々は賛成しない」

「そういうことだ」

上官からの命令であつた。

「ならば。いいな」

「忘れるのだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

返答できなかった。海軍ならば即答するものだ。しかし今回ばかりはそれがどうしてもできないのだった。伊藤は俯いたまま沈黙していた。

しかし艦長も副長も。その彼の心がわかつているのかあえてこう言うだけであつた。

「今はいい」

「答えられなくともな」

「申し訳ありません」

「しかしだ」

「あまりにも噂の多い人物だ」

このことを言うのである。

「しかも妾の娘さんだ」

「ならばな。忘れるしかない」

こう言つて彼を止めた。彼も答えることができなかった。それから数日彼は船から出なかつた。とても出られなかつた。そして出るようになつてからも。彼女の通る道はあえて避けて通つた。こうして自分から忘れようとしたのだ。だがある休日。それは突如として終わってしまった。

「あつ・・・・・・・・」

「お久し振りです」

あの袴ではなく白い洋服を着ていた。その服を着た様子と横須賀の街で会ってしまったのだ。これは全くの偶然の結果であつた。

「近頃どうされていたのですか」

穏やかに彼に問うてきた。

「御会いできませんでしたが」

「それは」

本当のことは言えなかった。つい口籠ってしまふ。

「何でもありません」

「お忙しかったのですか？」

「ええ、まあ」

そういうことにしたかった。だからその言葉に乗って頷いた。

「実は。それで」

「そうだったのですか。それですか」

「ええ、おそらく今後も」

「それではですね」

祥子はまた静かに彼に声をかけてきた。

「今はお休みですよね」

「はい」

避けたかった。だがそうはいかなかった。自分でもあがらえない何かがあった。それに逆らえず彼女の言葉に応え続けていたのだ。

第十一章

「その通りです」

「では」

祥子もそれを受けてまた言ってきた。

「宜しければですが」

「街をですね」

「そうです。案内させて下さい」

やはり言つのはこのことだった。

「宜しければですけど。本当に」

「わかりました」

断ることができた。そしてそうしなければならなかった。しかし彼はこう言ってしまったのだ。言わざるを得なかった。何かに動かされて。

「それでは」

「ではどうぞ」

「はい」

祥子の差し出した手を取りさえた。

「こちらですので」

「それでは。御願います」

こうしてまた祥子と共に歩いた。それからもだった。会えば街を歩き二人の時間を過ごした。それが多くなるにつれ心は彼女に傾いていく。そして遂にだった。

「あのですね」

「はい」

二人はまた街を歩いていた。その途中に休憩で喫茶店に入った。そこでコーヒーを飲みながら祥子が伊藤に対して切り出してきたのである。

「今度の日曜ですが」

「日曜ですか」

「空いているでしょうか」

おずおずとした調子で伊藤に問うてきたのだった。

「日曜日。如何でしょうか」

「ええ、その日でしたか」

静かに祥子の言葉に答えた。

「大丈夫です。御安心下さい」

「そうですか」

「それですね」

祥子の言葉に応えてから自分から尋ねた。

「何かあるのですか」

「実はその日にです」

「ええ」

「父が。来ます」

こう彼に話をしてきた。

「父が。私の家に」

「お父上といいますと」

「はい。普段は東京にいる」

おずおずとこう切り出してきた。

「その父が。こちらに来るのです」

「そうなのですか」

「それで。宜しければ」

おずおずとした口調の言葉が続く。

「御会いして頂けませんか」

「お父上にですか」

「お嫌ならいいです」

俯いて顔を少し赤らめさせての言葉だった。

「お嫌でしたら。それで」

「いえ」

ここでも同じだった。言葉は自然に出た。

「行かせて頂きます」

「私の家にですね」

「あの洋館ですね」

このことを尋ねた。これは念押しだった。

「あの洋館に来て頂きたいのですね」

「そうです。その通りです」

伊藤の言葉にこくりと頷いてきた。二人共コーヒーを他所に二人の話に入っていた。従ってもうコーヒーは目には入っていないかった。

「あの家に。どうか」

「わかりました」

あらためて祥子の言葉に頷いてみせる伊藤だった。

「それでしたら」

「有り難うございます」

「それでは今度の日曜に」

「はい」

顔を真っ赤にさせて伊藤の言葉に頷いてきていた。

「御願います」

「わかりました」

自分の心の動きも率直に出してしまった言葉にも驚いていたがそれはあえて隠していた。本当に信じられないことであった。もう迷いはなかったのだ。ただ彼女の申し出を受けた。それだけだった。艦長や副長の言葉はわかっていたがそれでもであった。彼は頷いたのである。

ふとコーヒーを口に含む。含んでみるとそれは。

「これは」

「もう冷めていますね」

「はい、全くだす」

苦笑いを浮かべ合つての言葉であつた。

「早いですね。冷めるのが」

「全くだす。です」

伊藤は苦笑いと共に祥子に言った。

「これもまたいいものですね」

「はい。熱さはないですが」

「苦く。それでいて」

「甘いです」

「熱さもまた必要ですが」

「それだけではないですね」

二人がこのコーヒーから学んだのはこのことだった。

「ちゃんと。味があればそれで」

「はい、いいと思います」

「それでは次の日曜に」

「ええ」

言葉を交えさせる。

「御願いますね」

「こちらこそ」

その冷めてしまったコーヒーを飲みつつまた話した。そしてその次の日曜日。海軍の軍服で祥子の洋館の前にいた。その彼を出迎えたのは桜色の小袖を着た祥子だった。

「ようこそ」

「ええ」

まずは祥子の挨拶に応える。

「おいで下さいました」

「それではですね」

「はい」

さらに言葉を交えさせる。

「こちらです」

「それでは」

案内されて洋館の中に入る。欧風の焦茶色の木の扉をくぐると白い壁と扉と同じ色の木の階段や床、それに扉が見える。館の中は外観よりも広く見えた。

「中はじめてでしたね」

「はい、そうです」

緊張した顔と声で祥子に答える。

第十二章

「こうなっていたのですか」

「ここに。住んでいます」

静かな声で伊藤に答えてきた。

「その。婆やお手伝いの人達と」

「そうでしたね」

「ええ。それで今日はお父様が来られていて」

「ええ」

「こちらです」

右手でそつと前を指し示してきた。

「こちらを。昇って下さい」

「二階ですね」

「はい、こちらです」

こう伊藤に告げてきた。

「こちらに。どうか」

「わかりました。それでは」

こうして祥子に案内されて階段を昇っていく。階段は一步ごとに木を踏む音がする。その重く低い音を聞きながら二階に上がり。そうしてその中の一室の前に案内された。

「お父様」

祥子はその焦茶色の扉をノックしてからこう呼んだ。

「お連れしました」

「うむ」

重厚な返事が返って来た。伊藤はその声を聞いていよいよだと心の中で身構えた。その岩山善四郎、祥子の父の声であった。

「それでは。御前も来なさい」

「わかりました」

父に対して告げ終わる。その後でまた伊藤に対して述べてきた。

二階は吹き抜けになっており館の中央を囲むようにして四方に部屋がある。廊下に沿って並んでいる。二人のそのうちの一室の前にいるのだ。

「それでは。御一緒に」

「はい」

こうして二人でその部屋に入る。部屋に入るとそこに袴の一人の老人が立っていた。小柄であるが姿勢はしっかりとしている白髪頭を奇麗に後ろに撫で付け顔は端整で唇が薄い。言わずと知れた岩本善四郎だ。日本の黒幕の一人とすら言われるその大物である。

「はじめまして」

「はい」

伊藤はその老人の言葉に敬礼で挨拶を返してきた。

「私のことは知っているな」

「ええ」

緊張し目を向けて彼の言葉に応えた。

「岩本公爵ですね」

「そうだ」

重厚な声であつた。

「私かな。岩本善四郎だ」

「お話は聞いています」

伊藤は静かにこう言葉を出した。

「この館の主だと」

「そう。そしてだ」

岩本は祥子に顔を向けてまた言ってきた。

「祥子の父でもある」

「お父上ですか」

「既にそれは聞いていると思う」

それを見抜いての言葉であつた。

「違うか」

「いえ」

その気迫と威圧感に負けそうだった。伊達に首相を務め黒幕とまで呼ばれているわけではなかった。若い頃は世界各国を歩き回り修羅場を潜り抜けてまで日本の為に動いていたという。そうした生い立ちからも発される威圧感であり伊藤は内心たじたじとなっていた。だがそれでも何とか彼と対していたのである。

「その通りです」

「そうか、やはりな」

岩本は彼の今の言葉を聞きまずは頷いた。そしてそれからまた言ってきた。

「それではだ」

「何でしょうか」

「話がしたい」

彼の方から切り出してきた。

「それで君にここに来てもらったのだ」

「そうでしたか」

「伊藤真太郎少尉だったな」

今度は彼の名を呼んできた。

「間違いないな」

「その通りです」

ここでも隠しはしなかった。隠してどうにかなるものではないことがよくわかっていたからだ。だからこそ毅然として返したのである。

「それは」

「そうだったな。では」

「はい」

「まずは座ろう」

こう伊藤に言ってきた。

「そのソファーにな」

「わかりました。それでは」

「では様子」

「はい」

今度は祥子に声をかけ彼女も静かに応えてきた。

「コーヒーを用意してくれ」

「畏まりました」

「三つだ」

数も指定してきた。

「三つだ。いいな」

こうしてコーヒーも言われ伊藤は部屋の黒い皮のこれまた重厚な幅の広いソファーに座った。向かい側には岩本がどっしりと腰を下ろしている。祥子は彼の横だ。小柄の筈なのに威圧感は相変わらずだ。伊藤はその彼と何とか対しながらそこにいたのであった。

コーヒーも手につけない。ただ待っていたのだ。彼が何を話するか。固唾を飲んで彼の動きを待ち見守っていたのである。そして。

「話は他でもない」

「何でしょうか」

「娘のことだ」

横目で祥子をちらりと見ての言葉だった。

「娘は間も無く学校を卒業する」

「そうなのですか」

「以前から決めていた」

今度はこう言ってきた。

「学校を卒業したならばすぐにだ」

「すぐに？」

「嫁がせるつもりだった」

「左様ですか」

「そしてだ」

伊藤に言わせないかのようにまた言ってきた。両手を和服の袖の中で組みそれがまた威厳を醸し出していた。一介の海軍将校では到底太刀打ちできないものがそこにはあった。

「君にここに来てもらった」

「私に」

「娘のことは知っているな」

今度はこのことを問うてきた。

第十三章

「祥子のことは」

「はい」

強張っていた。その顔での返答だった。

「それは。もう」

「わかつているのなら話は早い」

伊藤の言葉に応えてからまた言うのだった。

「いいのか？それで」

「いいのかといえますと」

「だからだ。貰ってもらえるか」

これまたかなり率直に彼に対して問うてきた。

「祥子を。それで」

「それは」

「わしのことも知っているな」

「そうです」

この返事もまた決まっている返事だった。

「それももう」

「はつきり言おう。わしの評判は悪い」

言いにくいことを自分から隠すことなく言う男だった。そしてそこには悪びれたものも姑息なものもなかった。ただ事実を言うだけである。

「海軍でもな」

「それは」

「隠すこともない」

そしてこれを隠すなど彼に返すのだった。

「これはな」

「そうですか」

「事実が事実だ」

やはり自分でこのことを受けている岩上だった。

「それを隠すつもりも拒むつもりもない」

「わかりました」

「そのうえでまた聞こう」

厳粛な言葉がまた出された。

「娘を。妻に貰ってくれるか」

「実を言いますと」

まずこう言う伊藤だった。

「私も考えていました」

「考えていたとは」

「はい。あえて名前は申しませんが」

それは隠すのだった。

「ですが上官に制止されたのは事実です」

「そうか。やはりな」

岩上はそれを聞いて納得した顔で頷くのだった。

「そうだと思っていた」

「そして私も悩んでいました」

「悩んでいたか」

「どうしようかと」

このことを告げる。

「どうすべきかと。思い」

「思い」

「長い間船から出ることはありませんでした」

何とか言葉を口から出すのだった。本当に何とかだった。

「船から。ですが」

「娘と会ったのだな」

「そうです。その時断ることはできませんでした」

このことを岩上と。そして祥子に対して話すのだった。

「いえ、逆らえませんでした」

「逆らえなかったか」

「こう言つてしまえば軍人失格でしょう」
じつと岩上と祥子を見て語る。

「ですがこれは。私は」

「己の心に逆らえなかったのだな」

「その通りです。どうしても」

「どうしても？」

「はい、ですから」

また口を開いて述べた。

「私はお嬢さんと」

「わかった」

岩上は彼のその言葉を受けて頷いた。

「君の心は」

「はい」

「済まない」

そのうえで礼の言葉を述べるのだった。

「わしのことも。娘の生まれのことも知りながら」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

岩上の言葉を沈黙して聞いていた。あえて何も語らず。ただ聞くだけだった。

「受けてくれたか」

「迷つたのは事実です」

「誰でも迷うものだ」

それは当然だというのだった。彼のその迷いもまた。

「何かを決断する時はな。そして」

「そして？」

「決断するものだ。だが君はあえてそれを受けてくれた」

「有り難うございます」

「いいのだな」

ここまで話してまた彼に対して問うのだった。

「娘の夫になり」

「決めましたから」

「そうか」

「そうです」

また岩上の言葉に対して頷いた。

「私は。ここで」

「済まないな。本当に」

岩上にとってはこれ以上になく有り難い言葉だった。目は潤んでいる。その顔はあくまで厳肅で岩の様であつたがそれでもだった。目は違つていた。

「それではだ」

「それでは？」

「後は任せてくれ」

こう伊藤に対して言つてきた。

「後はな。任せてくれ」

「？という」と

「君がこのまま娘と結ばれるとする」

このことをまず彼に話した。

「そうすれば君はこのまま海軍にはおれないだろう」

「それは」

「わかつている。これもな」

すべてわかつている言葉だった。

「全ては。わかつていることなのだ」

「そうなのですか」

「海軍は好きなのだな」

伊藤に対して問うてきた。

「好きだな・そうだな」

「はい、そうです」

ここでも伊藤は隠さなかった。事実をそのまま告げたのである。

「その通りです。私は」

「そうか。海軍にいたいのか」

「はい」

「だからだ。全てはわしに任せてくれ」

伊藤の目を見つつの言葉であった。

「わしにな。それでいいか」

「わかりました」

彼も既に腹を括っていた。

「それでは」

「うむ。そう言ってもらえて何よりだ」

岩上も彼が腹を括っているのを見て安心したように頷いた。

「君にも。祥子にも」

「お嬢さんにも」

「迷惑がかからないようにするからな」

「それは一体」

「娘を困らせる親はおらん」

こう言つて口元を綻ばせてきた。

「そういうことだ」

「!？」

「案ずることはない」

いぶかしむ顔になった伊藤に対して述べてきた。

「そういうことだ」

「はあ」

「何度も言つが任せておいてくれ」

また言つてきた。

「それではな。娘を頼むぞ」

「わかりました。それでは」

こうして伊藤は祥子と結ばれることになった。しかしそれに当たっては様々な困難があつた。だがそれは一つずつ解決されていったのだつた。

第十四章

「それは本当ですか」

「はい」

あの喫茶店で祥子と会っていた。そこで彼女から直接言われたのである。

「私は。正式にそうなったのです」

「そうですか。娘に」

「縁組です」

縁組という言葉が出て来た。

「縁組で。お父様の正式な娘となりました」

「正妻の娘にですか」

「そうです」

こくりと頷くのだった。

「私を。迎え入れて下さったのです」

「そうですか。貴女を」

「新しいお母様ですが」

つまり岩上の正妻である。正妻と妾の間には様々な因縁があるのはよくあることだ。

「ですが。快く迎えて下さいました」

「そうだったのですか」

「お父様には私の他にもそうした人がいるらしくて」

やはりこれも当時ではよくあることだった。宰相を三度務め元老として陸軍の領袖の一人でもあった桂太郎も芸者を愛人に行っていた。伊藤博文に至ってはあまりにも有名だ。彼の好色さは生前から風刺画の題材となりハルビンで暗殺された時にもそれが揶揄されて程だ。

「ですから。そういった方々も」

「そうでしたか」

「そして全てを公にされました」

「全てとは」

「御自身の資産です」

次はこれだった。

「これにつきましても」

「！？そういえば」

ここで伊藤にも思い当たる話が出て来た。

「公爵は全ての資産を公開され」

「はい」

「不正がなかったことが確認されたとのことです」

「そのうえで」

さらにあるのだった。

「もう。公から退かれ」

「そうして？」

「京都に入られるとのこと」

今度はこれであつた。

「京都の。お寺に」

「お寺というと」

「はい、そうです」

これはよくわかる話であつた。伊藤にも。

「出家されるということです」

「それはまた古風な」

話を聞いて思わずこう言ってしまった伊藤だった。

「出家されるとは」

「全てを捨てた証とされたいそうです」

だからだというのである。

「それにより」

「そうのですか」

「実際に。もうその準備を進めておられて」

「もうですか」

「はい。お寺の方とも」

「こう言うのである。」

「お話を進めておられるとのことですよ」

「そうだったのですか」

「ですがこれで私達には」

「迷惑はかからないと」

確かにそこまでやればである。如何に日本の黒幕とまで言われている男の妾の娘との婚姻であつてもだ。伊藤に迷惑がかかると思へなかつた。

「こう仰いました」

「公爵はそこまで」

「ですから伊藤様」

「はい」

「私達は幸せになりました」

「こう伊藤に対して言つてきた。」

「絶対に。何があつても」

「そうですね。公爵の御心を受けて」

「私にも。僅かですが資産を分け与えて下さつたので」

「それですか」

「伊藤様の海軍でのお働きに御迷惑はおかけしません」
静かに述べてきた。

「何があるうとも」

「有り難き御言葉。では私は」

「伊藤様は？」

「これよりこの身を皇国と陛下、そして貴女の為に捧げましょう」
あらためて誓いの言葉を述べたのであつた。

「何かあるうとも」

「私の為にもですか」

「そうです」

真剣そのものの言葉であつた。

「今後永遠に」

「では私もまた」

それを受けて祥子も言ってきた。

「その貴方の為にこの身を」

「捧げて下さるのですね」

「はい、何があるうとも」

「それでは」

今二人の心が重なり合い一つになった。伊藤にとっては最高の良縁となったのだった。伊藤真太郎、後に第二次世界大戦で活躍し戦後は自衛隊において将補にまでなり退官後は国会議員になり日本の国防に貢献した。その彼の生涯の伴侶と出会った時の話である。

良縁 完

2008・11・2

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8413f/>

良縁

2010年10月8日15時02分発行